

# 大学入学共通テストの探求 ②

## 地理B第1・2問の分析を通して

担当 蒼下和敬

### 一 第1問

「世界の自然環境」から6問(マーク数7)が出題された。2パート構成で、Aパートでは気候全般、Bパートでは山脈を中心とした地形について主題探究的な出題がなされ、カルスト地形など様々な地形を網羅的に出題する形式はなかった。すべての問題が資料を基に推論して考察する力を問うており、知識の単純な再生を問うものではなかった。平均12点/配点20点。

#### ピックアップ題 問1

1

ケッペンの仮想大陸をベースに等高線を付した世界地図を用いて、他の気候因子を抑え、隔海度の影響が最大であることを比較できる2地点を、6地点の中から選ばせる問題。単純に沿岸部と内陸部を選ぶのではなく、地形や標高、大陸東岸・西岸性の気候などを排除して、最適な検証方法を推論して検討する新傾向の出題であると言える。

### 第2問

「産業」全般から6問が出題された。第2問は系統別の単問形式で、農業統計(問1)、水産業(問2)や製造業売上高の地域別推移(問5)、店舗の業態別立地(問6)は、授業で学習した内容を基に推論して解く定番的なものであるが、問6が全問中最も正答率が低い(13%)のは注目点である。また、試行調査に続き本問でも工業立地をモデル化した問題が出題された(問3)。平均11点/配点20点。

#### ピックアップ題 問4

11

北海道・東北・関東における牛乳・バター・アイスクリームの工場数を推論させる意図の問題。サウスの文は3製品のいずれかの製造上の特徴を示す。だが本問は、製品ではなく、サウスと3地域の組合せを問う、北海道が原料供給地、関東が大消費地と気づけば、容易に解ける。例えば、アイスを示す文と工場数はどれかと問うこともできた。

### 二 紙上ディスカッション

以下、自由参加形式で意見交換したものを要約して報告する。

宅島(広島大・院) 第1問は入試問題を変えたいという熱意を感じた。問1は、長いリード文とモデル図が用いられている割には答えがシンプル。もう一步、思考させられる余地がある。問4は「知識」で解答できる。第2問問4は、牛乳は冷凍と冷蔵はどちらに輸送費がかかるかなど、さらに条件設定が必要であろう。

中村(鳥取西高校) 第1問問1は、数ある気候因子の中から条件を揃え、2地域の気候が受ける隔海度の影響を比較する「科学的な調査方法」の理解を問うている。この力は「STEAM」教育のS(Science)に相当し、地理教育でも重視され始めている。第2問問4は、生乳を分離するバターなどを想起できたかどうかのポイント。

井上(川崎高校) 第1問問1は、原理原則を押さえていれば解けるが、出題傾向が変わったことで受験生は戸惑ったと推察できる。資料を選ぶ問題や雨温図が隠された問題が登場し、上下下位層の正答率の差を広げたと考えられる。説明文も長く(問4・5の会話文設定は疑問)、地理的な思考力を純粋に問えたか疑問が残る。

山口(上五島高校) 難化の背景には、解答に必要な思考プロセスの複雑化が考えられる。各問では地理的事象の要因や影響を深く追究させている。また、「なら、なら」という事象間の関係性を問うたものも増えた。授業では、真正の文脈の中で「なぜそうなるのか」と地理的事象間の関連性を探求する視点も重要である。

首藤(広島井口高校) 第2問問4は、本校生徒はサウスの文と表だけで解いていた。問6は小売業の統計があるのに、この読み取りを飛ばし、「コンビニ」はどこでもあるという感覚で誤答を選んだ者も多い。仮定の上で仮定を作って何となく選択するのはなく、資料を適切に読み取り、正しく考察する力を育む必要がある。

後藤(佐倉高校) 資料や会話文の分量さに圧倒され、時間が足りなかつた受験生がいた。センターの『問題作成方針』にある『どのように学ぶか』を踏まえた問題の場面に設定が強く表れており、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をどのように具体化するかが個々の教員に求められる。

※平均点・正答率は、ベネッセ「大学入試共通テスト徹底分析」を基に算出。  
(山口県立下関南高等学校)